

旅人たちの共同体

— 日本人バックパッカーに関するフィールドワークから —

有本 尚央

はじめに

2005年4月12日午前11時、大阪港国際フェリーターミナルには里帰りの中国人たちが大量の荷物と共に出国審査を待っていた。税関の職員と船会社の受付のほかは、ほとんど中国人で占められていて、あたりは中国語が飛び交い、早くも異国情緒が漂っていた。そのような空間のなかに、大きなバックパックを背負った日本人がぼつぼつと疎らに座っていた。彼らはバックパッカーと呼ばれる旅行者で、国際フェリー新鑑真号に乗って中国・上海を目指し、その後はそれぞれの興味に従ってある者は西へ、ある者は南へと旅をする。バックパッカーについてのフィールドワークという、通常のバックパッカーにはない意図はもっていたものの、筆者もまた、バックパッカーの一人としてフェリー出航を待っていた。上海まで二泊三日かけて移動する新鑑真号を利用するバックパッカーは、旅行期間が比較的長い。筆者が船内で出会った日本人バックパッカーのなかには、短期間のアルバイトでまとまった金を稼いでは数ヶ月間の東南アジア行きを繰り返している者、大学を1年間休学してユーラシア大陸横断を目指す者、日本での職を捨て、世界を巡る無期限の旅へと出発しようとする者などさまざまな人々がいた。

日本人がバックパッカーとして海外を一人旅するという社会現象は、1960年代後半になってようやく始まった¹⁾。その後、70年代から80年代にかけて、沢木耕太郎や藤原新也などの作家たちが自らの海外での1人旅を著し、それに魅せられた多くの若者たちがバックパッカーとして海外を旅するようになった（沢木 1986、藤原 1982 など）。90年代には、お笑い芸人・猿岩石のヒッチハイクによるユーラシア大陸横断というテレビ番組企画に典型的に見られるような、お金が無くても言葉を知らなくてもできる、苦しくとも楽しいバックパッキングのイメージが、メディアを通じてより多くの若者たちをとらえるようになり、「バブル期」ともいえるバックパッカーの爆発的隆盛を見た²⁾。そして現在、バックパッカーおよびバックパッキングという旅行スタイルは一般的に認知され³⁾、大学生が長期休暇を利用しバックパッカーとして海外旅行することも珍しくなくなった。

バックパッキングが一般化したのと並行して、『地球の歩き方⁴⁾』に代表されるようなガイドブックが1980年頃から次々と出版された。こうしたガイドブックには、観光地の解説のほか、宿泊施設の案内や訪問地の地図、交通機関に関する情報などが掲載され、旅行者はガイドブックを片手に見知らぬ土地を容易に旅することが可能となった。さらに近年ますます多様化する旅行者に合

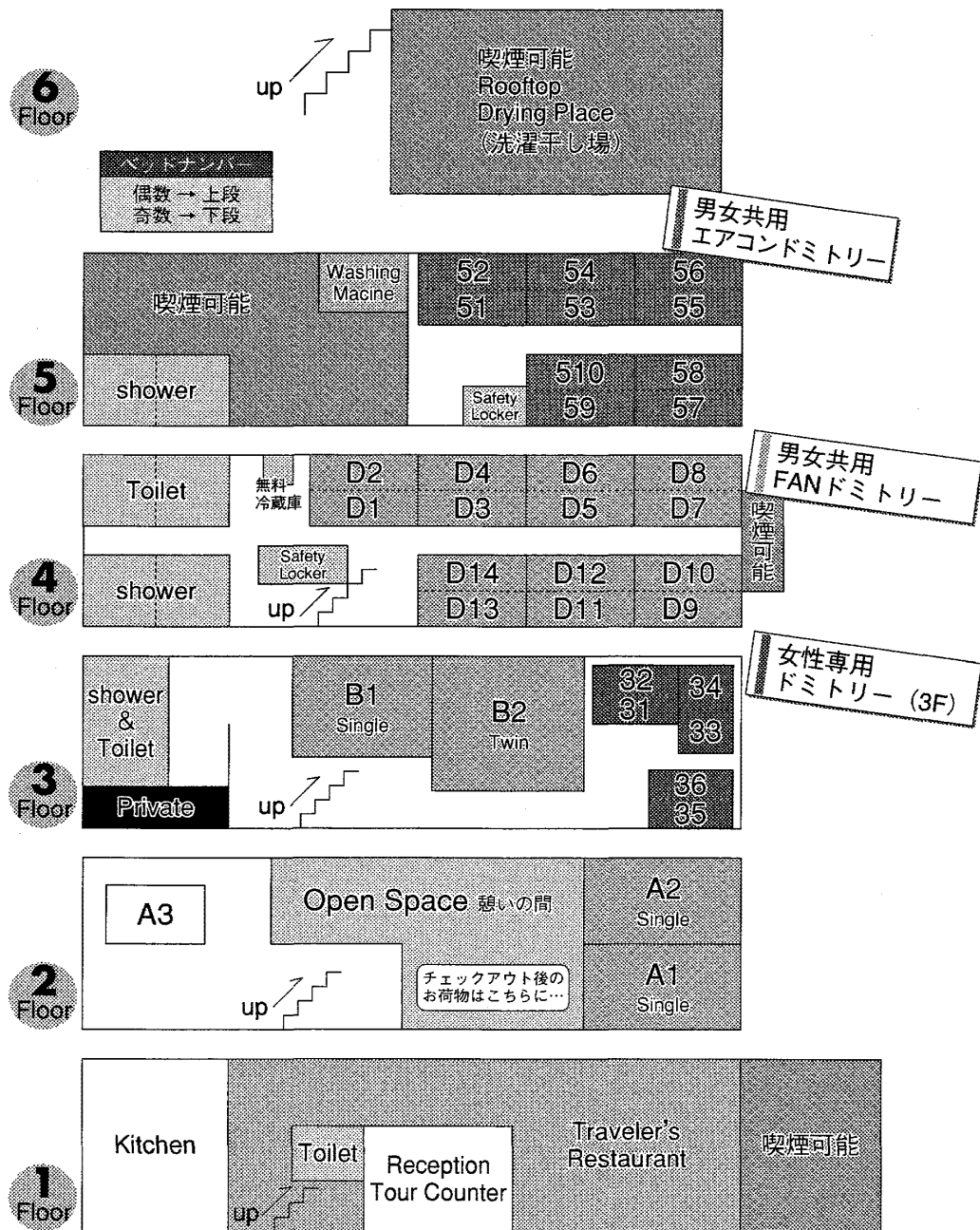
わせて、ガイドブックは変化をとげた。例えば『地球の歩き方』はそのコンセプトを、それまでの「一人で、しかも安く旅をするためのガイドブック」から多様な旅行者のニーズに応えることのできる「選択肢をたくさん出して、旅行者に選んでもらうという情報の出し方」へと変化した（河出書房新社 2000）。また、ガイドブックのニーズによる住み分けも起こった。例えばガイドブック『旅行人ノート⁵⁾』は「一人で、しかも安く旅をする」ことを主眼とするバックパッカーを一般的対象としている。

『旅行人ノート』は現在、『アジア横断』、『メコンの国－インドシナ半島の国々』、『アフリカーアフリカ大陸 37 カ国ガイド』など 6 種類が刊行されていて、アジア・アフリカ地域を縦横断あるいは周遊するためのガイドブックとなっている。そして、これらのガイドブックに掲載されている「推奨ルート」が多くのバックパッカーのモデルコースとなっている。例えば、ガイドブック『アジア横断』にはインド・コルカタからトルコ・イスタンブールまでのモデルルートが掲載されている。このルートで挙げられているプランは 45 日間、90 日間、180 日間の 3 種類で、一般的なガイドブックと比較すればかなりの長期間の旅行を射程としていることが伺える。また、旅行の費用に関しては、一日 20 ドルを目安としている。『旅行人ノート』が『地球の歩き方』と大きく異なるのは、国境やビザに関する情報が充実している点にある。長期間の旅行を予定しているバックパッカーには、陸路で国境を越える際の出入国や両替に関する情報が必要とされ、一つの国に焦点を絞ったガイドブックよりも複数国の移動に関する情報が詳細に書かれているガイドブックのほうが一般的に利用される。例えば、中国・北京で取得できる各国ビザの情報欄にはインド大使館、パキスタン大使館、イラン大使館に関する情報が掲載され、大使館の住所、電話番号、大使館までの道のり、開館時間、ビザ料金、ビザ発給までの待ち時間などが詳細に記述されている。中国・北京のパキスタン大使館の項には「スストでも取得は可能だが、事前にビザを取得する場合はウルムチ、カシュガルに領事館はないので北京で。最近はずーずーに発給しているようだが、流動的」という記述があるように、ガイドブックに掲載されている情報によって旅行ルートがおのずと限定されていくような傾向がある。

このようなガイドブックに掲載されている宿泊施設の多くはゲストハウス（資料 1）と呼ばれるもので、東南アジアでは 1 泊 10 ドル以下、ヨーロッパでも 25 ～ 30 ドル前後の低廉な宿であり、ドミトリ－という宿泊方式を持つものが多い。ドミトリ－とは、大部屋にベッドが並んだ、いわゆる相部屋であり、最も安価な宿泊を可能にする。特に長期間の旅行を予定しているバックパッカーにとっては、日々の出費である宿泊費をなるべく安く抑えようとする傾向が強い。その背景には「少しでも長く旅を続けたい」といった個人的願望や、『『貧乏旅行こそ本当の旅』というアジテーション』（新井 2001：116）などさまざまなが、一様にして節約を旨とするバックパッカーは多い。

ゲストハウスには長期バックパッカーが集まり、短期間のパッケージツアーなどの旅行者とは異なるバックパッカーのための社会空間が形成されている。そしてゲストハウスの中でも、際立った特徴を持つのが、日本人バックパッカーのあいだで「日本人宿」と呼ばれるゲストハウスである。「日本人宿」は、宿泊客の大半を日本人が占め、多くの場合、日本語を話すことのできるスタッフ

【資料1】 ゲストハウス見取り図の一例



(「Khaosan Traveler's Lodge」 <http://www33.ocn.ne.jp/~asiabeer/> 2006年10月19日)

や日本人スタッフによって経営されている。そこには異国の地にも関わらず、まるで日本にいるような「雰囲気」の空間を見ることができる。そのような日本的な空間は、さまざまな日本（人）的なモノの設置だけではなく、宿泊者間の相互行為に関する、制度とでもいいような慣習から醸成されている。本稿では、2005年度に行なったフィールドワークをもとに、この「日本人宿」で繰り広げられるバックパッカーの相互作用を通して形成される秩序を、事例を挙げながら分析的に記述したい。

フィールドワークは、2005年4月12日から2006年2月24日までの319日間、合計18ヶ国で行

った⁶⁾。期間中はバックパッカーと行動を共にし、参与観察を行い、適宜インタビューを試みた。移動ルートに関してはガイドブックに掲載されている「推奨ルート」を参考にし、現地の情勢やバックパッカーからの情報と摺り合わせながら適宜決定した。フィールドワークを行なった319日間のあいだで筆者が実際に宿泊した施設は53ヶ所、その中で「日本人宿」と呼ばれるゲストハウスには11ヶ所、全行程中でドミトリーを利用したのが延べ141日間であった。長期滞在した都市はネパール・カトマンズ（47日間）、パキスタン・カリマバード（26日間）、トルコ・イスタンブール（35日間）、タイ・バンコク（26日間）である。他にも「有名」な「日本人宿」のあるエジプト・カイロには11日間滞在している。また、トルコ・イスタンブールの「日本人宿」では24日間、管理人（後述）としてゲストハウスの運営に関わった。

1. 「日本人宿」に見られる特徴

「日本人宿」は、日本人バックパッカーの「たまり場」となっている。その国ごとのビザや治安の状況、バックパッカーの旅行プランなどによって宿泊客の滞在日数はさまざまだが、短期滞在では一泊、長期滞在になると数ヶ月にわたって滞在する日本人旅行者がいる場合もある。このような「日本人宿」に見られる大きな特徴として、ドミトリー、フリースペースの設置、日本語書籍の充実、情報ノートの設置、シェア飯制度、管理人制度などが挙げられる。ただし、これらの特徴は「日本人宿」としての必要条件ではなく、例えば東南アジア地域では物価安で自炊の必要がないためキッチンが備え付けられていないといったような、その土地にあわせた仕組みとなっている。例えば、タイ・バンコクの安宿街であるカオサン・ロード周辺にある「日本人宿」では「10大特徴」を掲げ、日本人客の誘致に力を入れている。この「10大特徴」は、①24時間出入り（チェックイン受付）可能・門限なし、②女性専用ドミトリールームの設置、③ドミトリー専用無料セーフティロッカーの完備、④無料冷蔵庫の設置、⑤珍しい方面別「情報ノート」の設置、⑥豊富なマンガ本（2000冊以上）や単行本そして三角枕がある「憩いの間」の設置、⑦チェックアウト後のシャワー等館内設備の利用、⑧10連泊以上の客へTシャツ進呈、⑨旅行代理店併設、⑩日本人旅行者利用率95%以上というもので、タイ・バンコクという場所にもかかわらず、日本人にとっての「快適さ」を重要視したようなシステムとなっている。また、トルコ・イスタンブールにある「日本人宿」では、①日本語予約が可能、②キッチン利用無料、③日本語インターネット環境、④フリースペース、⑤清潔な部屋、⑥24時間ホットシャワー、⑦日本語書籍の充実、⑧荷物預かり無料、⑨情報ノートの設置が特徴として挙げられていて、ここでもタイ・バンコクの「日本人宿」と同じように日本的な「快適さ」を謳っている。以下では、まずこのような「日本人宿」に見られるいくつかの特徴を詳述してみよう。

1-1. ドミトリー

ドミトリー（写真1）という言葉は、元来、学生寮や寄宿舎を意味する言葉であるが、ゲストハ

ウスにおいてはいくつかのベッドが並んだ部屋を共同利用し、宿泊客は一つのベッドのみを個人のスペースとして使用する場合を指す。前述したガイドブック『旅行人ノート』にもドミトリーに関して次のような記述が見られる。

一番安く宿泊できるのは、大部屋にベッドが並ぶドミトリーだ。いわゆる相部屋で、4～10人ほどが同じ部屋で寝起きを共にする。ユースホテルやYMCAを除き、男女の区別はない。個人用のロッカーがあればまだマシで、荷物はベッドの下や脇に置くため常に盗難の危険がつきまとう。実際、日本人専用のドミトリーでも盗難事件は起きており、「同じ日本人だから」という甘えは禁物。それなりのリスクは考えておいた方がいいだろう。

消灯時間はとくに決まっておらず、その部屋にいる人たちの雰囲気。いびきや人の話し声が気になって眠れないという人には向いていない。トイレとシャワーはたいてい部屋の外に共同のものがあるが、イランやトルコを除き、ホットシャワーや冷暖房の効用はあまり望めない。こう書くといいところがないようだが、一人旅のバックパッカーでドミトリーを利用する人は多い。料金が安いという理由もあるが、他の旅行者と知り合い、情報交換できるからだ（旅行人編集部 2002：328）。

ドミトリーを利用する宿泊客は安い値段で滞在できる代わりに、盗難やその他のリスクに対して自己管理することが求められる。部屋の清掃やベッドクリーニングなどのスタッフによるサービスもほぼ皆無な場合が多く、ドミトリーの運営自体がそこを利用する宿泊客の自主性に委ねられている場合が多く見られる。ただ、上記の引用にあるように、一人旅をするバックパッカーにとってドミトリーはさまざまなリスクを差し引いても、値段が安いことや他のバックパッカーと知り合う機会が多いこと、情報交換をする機会の確保という意味において重宝されている。

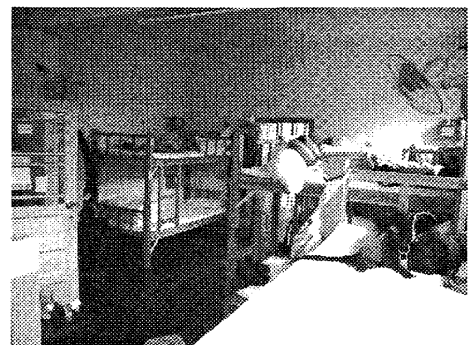


写真1：ドミトリーの様子

1-2. 情報ノート

「日本人宿」には情報ノート（写真2）と呼ばれる旅の情報を書き込むためのノートが設置されている場合が多い。バックパッカーの持つガイドブックではカバーされない情報やガイドブックの改訂が間に合わないような最新の情報が書かれているので、利用者はガイドブックと照らし合わせながら必要な情報をメモする。逆にノートに情報が不足している場合には「自分の持っている情報をなるべくノートに書き込んでいくのがマナー」（旅行人編集部 2002：317）とされる。もちろん、この情報ノートの性格上、書かれている情報は主観的なものであり、正確さを欠く場合が多く見られる。しかし、一部に情報ノートを作ることを旅の目的としたバックパッカーや正確で詳細な地図

を書くバックパッカーが存在し、彼らの書き込みは長期バックパッカーたちにとってブランド化され、彼らには一種のステータスが与えられている。

具体的に、このノートに書かれているのは、近隣地域への移動方法、近隣地域での宿泊施設、食事や観光などに関する詳細な情報、ビザやパスポートに関する情報、アジア圏やアフリカ圏などといった広範囲にわたる情報、さらに「旅の哲学」や暇つぶしのためのゲームに関することまで多岐にわたる。近年は、インターネットの普及により情報ノートの重要性が減少傾向にあるが、その代わりに公共道徳性が必要とされるガイドブックやインターネットでは掲載されないことのない、ドラッグや危険地域などに関するイリーガルな情報に紙幅がさかれている場合も見られる。

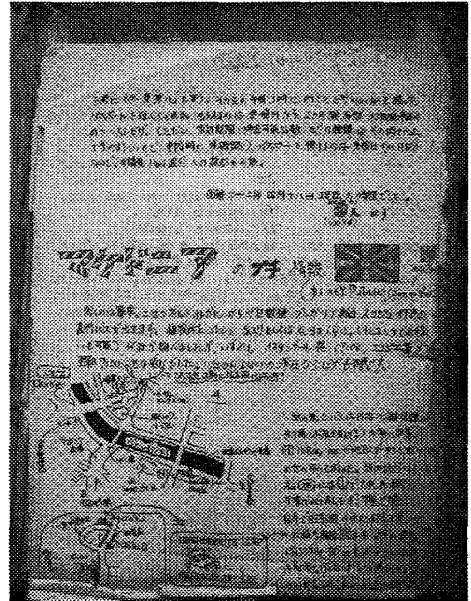


写真2：情報ノート

1-3. 日本語書籍

多くの「日本人宿」には日本語書籍が置かれている。その周辺地域のガイドブックが数冊置かれているだけの場合もあるが、多いところでは数百冊から数千冊もの日本語書籍が並べられ、書籍の充実がその「日本人宿」の宣伝効果となっていることがある。書籍の種類も幅広く、ガイドブック、旅行記から小説、ビジネス書、詩集、コミックなどが見られる。これらの日本語書籍は主にバックパッカーが読み終えた本を寄付したり、その「日本人宿」のリピーターによって直接日本から持ち込まれたりすることによって所蔵されていく。ある「日本人宿」では日本語書籍を5冊寄付すれば1泊分の料金が無料になるといった、積極的に日本語書籍を集めようとするシステムを整備している。これらの書籍は交換する場合を除いて、基本的に持ち出しは禁止されているが、稀に一部の利用者によって書籍が盗まれることがあり、「日本人宿」利用者のあいだで書籍の扱いが問題化されることがある。その際には、書籍のプライベートルームへの持ち込みが禁止される、あるいは本棚が施錠されスタッフの管理下に置かれ閲覧が許可制になることがある。

1-4. フリースペース

「日本人宿」にはドミトリーなどのベッドルームとは別に宿泊客が自由に利用できるフリースペース（写真3）が設けられている。フリースペースにはソファや椅子が備え付けられていて、宿泊客が自由にくつろぐ時や他の宿泊客とコミュニケーションを取り情報交換をするために利用される。情報ノートや日本語書籍もこの空間に設置されていることが多く、「日本人宿」の特徴が集約された空間と



写真3：フリースペースでのシェア飯風景

いえる。例えば、トルコ・イスタンブールにある「日本人宿」は、ビルの3フロアを使い、下の2つの階にドミトリー（1フロアにベッドが10個ずつ）、最上階にはキッチンとフリースペースが設けられている。フリースペースは3m×8mほどの広さでソファとテーブルが置かれている。フリースペースに隣接した部屋はキッチンとして使用されていて、冷蔵庫や食器棚などが置かれている。食事の時間帯になると宿泊客は近所のスーパーマーケットや市場で購入した食材を持ち込んで、調理し、フリースペースに置かれたソファに座って食事をする。

1-5. シェア^{めし}飯

シェア飯（写真3）はキッチンがある「日本人宿」にしばしば見られる制度で、宿泊客を代表した数名が食事（主に夕食）をまとめて作り、費用を利用者で分担するというシステムである。宿泊客が各々でキッチンを使用するとなると他の宿泊客の使用が終わるまで待たなければならない、人数が多い場合などは自分が使用するまでかなりの時間がかかることや単純に自炊する手間が省け、さらにコストを抑えるのにも効果的なので利用する者は多い。ただし、料理を作る側になると買出しや調理の手間によって一日の行動が食事を作ることだけになる場合があるので、長期滞在する予定で時間に余裕がある者でないと「料理当番」になることが難しい。「料理当番」は基本的にボランティアで常に存在する役割ではないが、キッチンや調理器具が充実した「日本人宿」などでは半ば常態化している。日本語書籍の場合と同じようにして日本の調味料がそろっている「日本人宿」もあり、「料理当番」はそれらの調味料と現地の食材を用いて「日本食もどき」を作ることが多い。

1-6. 管理人

管理人はその名の通り「日本人宿」のスタッフの一員として宿の管理業務に携わる者で、部屋の清掃や受付業務、さらには「客引き」などを行なう役割である。この管理人という役割がはっきりと制度化している「日本人宿」はそれほど多く見られないが、長期滞在者が「宿のヌシ」として宿の運営に携わっているようなケースを含め、「日本人宿」にとって大きな特徴のひとつといえるだろう。実際に筆者が管理人を経験したトルコ・イスタンブールの「日本人宿」では、一日に5ユーロの給料と管理人専用のベッドが与えられた。業務は宿泊客のチェックイン・チェックアウトの管理、宿泊予約の管理、部屋やトイレ・バスルームの清掃、ベッドメイキング、その他トラブルが起こった際のオーナーとの相談・仲介役になるといったものである。一日に5ユーロの給料は得られるが、観光ビザしか持たないバックパッカーには正規の雇用は違法であり、あくまでボランティアの枠を超えるものではない。この管理人という制度はその賃金の額からもわかるように「善意」で成り立っている役割だといえる。この宿泊客と宿のスタッフの中間に位置するような管理人という役割は、「日本人宿」内のさまざまなシステムを改変できるような多少の権限を与えられており、「日本人宿」の利用客のあいだで一種のステータスを持つ。

「日本人宿」に滞在するバックパッカーは、上記のようないくつかの設備や制度を共同利用する

ことによって互いにコミュニケーションをはかっていく。その上で相互に必要な情報を交換し合う、親密な関係性を築いていくといった行為が繰り返される。そして、管理人や料理当番、情報ノートに積極的に書き込む者などの「日本人宿」に対して「貢献」する者には宿の内でのあらゆる側面においてイニシアティブを握るような存在となっていく。

2. 「日本人宿」における相互作用

そもそもバックパッカーとして旅をするという行為には、パッケージツアーのように予定があらかじめ決められ、安心して異文化を体験するようなタイプの旅行とは異なり、日本という日常世界を離れて「現地の日常に溶け込む旅」（斉藤 2003：30）をすることが醍醐味であるとされる。バックパッカーになることを推奨するような言説にも「バックパッカーをするなら群れて動かない方がよい。1人で行動することが、自分を現地に投げ出すもっとも簡単な方法だ」（斉藤 2003：31）といったものが見られるように、「群れる」ということと対極に位置されるような旅行スタイルと一般的に認識されている。しかし実際にバックパッカーとして長期間海外旅行を続け、「日本人宿」という施設を利用する者たちは、特定の空間内で他の旅行者と接触し、コミュニケーションをはかり、情報交換を行い、他の旅行者との親密性を高めていく。ここには孤独でストイックな旅をするバックパッカーというイメージと相対するような、「日本人宿」を利用し他の旅行者と積極的に関わっていかうとする、いわば「群れる」バックパッカーというパラドクスを見ることができる。本章では「日本人宿」において「群れる」バックパッカーたちがどのようにして他の旅行者と関わっていくのかを見ていこう。

2-1. 新規参入

「日本人宿」に到着し、チェックインを済ますと、まず簡単に宿の規則を説明され自分の部屋あるいはベッドに案内される。自分に与えられたスペースにバックパックを降ろすと、多くのバックパッカーはひとまずフリースペースに顔を出す。そこには大抵、宿泊客が数人集まっていたり本を読んだり、会話していたりする。彼らに「こんにちは」などと挨拶すると、「こんにちは、どこから来ました？」などといった返事とともに自己紹介の時間が始まる。旅行期間の長い者同士であれば、「いつ頃の辺りにいました？」というような会話が始まり、互いのこれまでの旅話に花が咲き、共通の知人を探すといったことが行なわれる場合もある。この新規参入期間のあいだに、新規参入者は他の宿泊客からその宿に宿泊している人の紹介や宿近辺の飲食店の情報、その都市での観光情報などを教えてもらう。そして次第に他の旅行者と打ち解けていく間に、行動を共にするような親密な関係性が構築される。もちろんすべての新規参入者がこのように他の宿泊客に対して積極的に働きかけるわけではなく、中には一人で行動したいと考える者もいる。そういう者に対しては、他の宿泊客は互いに干渉しあうことはなく「儀礼的無関心」（Goffman 1963 = 1980）を装い、積極的なコミュニケーションを取ることはない。「日本人宿」に新規参入し他の旅行者と接触する

ことは、本人が望むのであれば比較的容易になされ、一方で他の旅行者と距離を置きたい者の場合でもそれは容認される。このように「日本人宿」に新たに参入する行為には、バックパッカー同士のゆるやかで開放的な関係性を見ることができる。

2-2. 情報交換

バックパッカーはガイドブックに掲載された情報を最新のもの、より正確なものへと断続的に更新していく。その際に情報ノートが活用されるが、それ以外にも他の旅行者が直接経験した「生きた情報」を得るという手段も多用される。フリースペースでの会話やシェア飯などの共同作業によってコミュニケーションを取るなかで互いの旅に関する情報を補完しあう。ただしこの場合、情報取得だけを目的とした一過性のコミュニケーションは敬遠される。「情報欲しいんですけどって言っても、すっともらげるわけじゃないけどね⁷⁾」、「会ってすぐに情報下さいっていうヤツはイラっとくる⁸⁾」という「日本人宿」宿泊者の発言が示唆するように、詳しい情報や特殊な情報を交換するためには相互にある程度の信頼関係が必要とされる場合が多い。この信頼関係はフリースペースでのコミュニケーションはもちろん、シェア飯への参加、情報ノートや日本語書籍への「貢献」度やバックパッカーとして旅することへの価値観がどのようなものかといった部分に左右される。このような信頼を求める関係性の背後にはバックパッカーが扱う情報の両義性を見ることができる。

一般に、日本人バックパッカーに流通する情報はリスクに関して両義性をもつ。例えば、最も特徴的な例がドラッグに関するもので、日本人バックパッカーのあいだではドラッグの購入方法や使用方法、トラブルの際の対処方法などありとあらゆる情報が流通している。他にも、2005年の時点で外務省から渡航延期や退避勧告が出され危険地域とされていたアフガニスタンに関する情報に関しても、ビザの発給、アフガニスタンへの入国方法、アフガニスタン国内での移動や宿泊に関する情報が日本人バックパッカー内で流通していた。こういった情報は、リスク回避のための情報ともなりうるが、リスクに積極的にアプローチすることも可能にさせるような両義的な情報であるといえる。両義的な情報に対して適切な判断をする能力、あるいはそのような適切性を支えるバックパッカー世界の秩序を習得しているか否かという「資質」が、フリースペースなどで行なわれるコミュニケーション行為を通して判断される。既に述べたように、「日本人宿」には開放的な関係性が見られる一方で、リスクを一元的に排除する「面白味に欠ける」バックパッカーでもなく、リスクを省みない「無謀」なバックパッカーでもない、リスクと適切な距離感を持つと相互に認め合うバックパッカー同士だけが親密な関係性を構築していくといった、閉鎖的な関係性も見られるのである。

ただし、このような閉鎖的な関係性は「誰かの知り合い」、どこかの「日本人宿」の長期滞在経験者、「情報ノート」の有名人などといった、その人物の属性を想像しうる場合には容易に乗り越えられてしまう。つまりその人物がそれまでに他所で「資質」を習得していると判断される場合や固有名詞的に認識できる存在である場合には、親密な関係性の中にただちに参入可能となる。

「私は知り合いがいたからよかったけど、初めての人には入りづらい雰囲気があるよね」(A氏 2006/1/26)

「日本人宿」に滞在する日本人バックパッカーは、海外という場所にいるということのさまざまなリスクを考えると同時に、リスクを誘発する可能性を含むような人間関係に対しても配慮していることが伺える。そのため適切な行動ができると判断される者やその「人となり」が認識されるような者に限定する閉鎖的な関係性を形成していく。

2-3. 「日本人宿」でのトラブル

「日本人宿」という空間で形成される開放性と閉鎖性は、さまざまなトラブルに遭遇した際に表面化する。筆者のフィールドノートから、いくつかの例を提示する。

2005年10月31日(月) トルコ・イスタンブール

管理人生活9日目。

夜、日本人の若者(男)と日本語が流暢なトルコ人(男)の2人組が訪ねてくる。

日本人の若者が「ベッドは空いているか」と言うので、いつもどおりチェックインの案内をする。しかし一通り説明して料金を受け取る際に、日本人の若者は突然「僕は他の宿を取ってるんで泊まらない、彼(トルコ人)1人だけ」と言いだす。

トルコ人のチェックインの手続きがすでに終わっていたので、今更断るわけにもいかずトルコ人だけ3階のドミトリーに案内する。

トルコ人は荷物を置いてフリースペースに上がってきて、他の宿泊客と話し始める。

管理人としても、宿泊客としても少し「特殊」な状況だと感じたので、何人かの宿泊客にトルコ人が泊まることになった経緯を伝える。そうすると、「仕方ないな、そこで断るわけにもいかないし」といいながら、皆それぞれ荷物の整理をし始めたりバックパックをベッドにくくりつけたりしだす。

2005年11月1日(火) トルコ・イスタンブール

管理人生活10日目。

昨日の晩、トルコ人は遅くまで他の客と話し込んでたみたい。その中の一人、Bくんはトルコ人が「気になる」ので「朝までへばりついておく」意気込みだったらしい。

朝一でトルコ人はチェックアウト。昨日一緒に宿に来た日本人の若者と待ち合わせて一緒に観光に行くとのこと。なにとはともあれ、「何もトラブルがなくてよかったね」という雰囲気が漂い、一件落着。

バザールに買出しに行って帰ってくると、例のトルコ人が3階のベッドで勝手に寝てる。留守番をしてくれていた数人の客に事情を聞くと、バス停で待ち合わせた昨日の日本人の若者が約束の時間になっても来なかったらしい。それで、もう一度宿に戻ってきたとのこと。なぜかトルコ人は手ぶら。

宿内に緊迫した空気が流れて、その場にいた数人で話し合いが始まる。

日本人の若者が「ドタキャン」したのは（そのトルコ人が）危険だからじゃないかとか、「昨日の夜のトルコ人との話の中で胡散臭いことがあった」などという話が出る。もはや宿全体にトルコ人に対する猜疑心が溢れているので、管理人の立場としてオーナーに相談してみるということではとまず話は落ち着く。

オーナーに一通り昨日今日の話をすると、「トルコ人がここに泊まる理由が見つからない」し、「何かあってからだと遅い」から出てもらおうということに決まる。

最終的に寝ているトルコ人をたたき起こして、出ていってもらう。その際に結構ごねたので少し手間取ったが、これでホントに一件落着という雰囲気には。

（フィールドノートより）

このように「日本人宿」を一般的に利用しないとされる者があらわれた場合、宿のシステムにしたがって宿泊しているとしても、宿泊客は宿の安全を守ろうと凝集性を高め「異物」を排除しようとする。異文化と接触し、「現地の日常に溶け込む旅」が重要であるとされる一方で、「日本人宿」内では安全で安心できる時間を求めてある程度の閉鎖的な共同体を形成することが宿泊客のあいだで共通認識となっている。

しかし、宿泊客があからさまな外部の侵入と判断する場合とは異なり、「日本人宿」の宿泊客がトラブルを起こした際には、このような閉鎖性はまた別の形をとってあらわれる。

2005年11月13日（日）トルコ・イスタンブール

今日は天気が悪く、みんな宿にひきこもりがち。

マンガや本を読む人、チェスに耽っている人も。フリースペースの人口密度高し。

CくんとAさんは近頃ずっとシェア飯の料理担当になっている。

2人の手伝いをする人もだいたいいつも同じ面子だ。

DくんとEくんがシェア飯を食べるといったのに出かけたきり帰ってこなかった。

Aさんがそれに対して2人に説教。

晩飯のことだけでなく、「身の回りをきちんと整理整頓しなさい、周りの人に迷惑がかかるでしょ」などと怒られてる。

DくんとEくん、素直に謝る。

周囲は「まあ解決してよかったんじゃない」なんて感じでわりと無責任。放置。

それでも「あいつらちょっと甘えすぎやろ」と怒りを露にするFくん。

「まあ、若いからしょうがないところもあるで」とたしなめるGさん。

結局、その後FくんはDくん、Eくんとは一切コミュニケーションを取らなくなる。

他の客は、ある程度コミュニケーションは取りながらも、「まあ、何を言っても変わらないでしょ」とあきらめムード。なにかバチっと境界線が引かれたみたい。

(フィールドノートより)

この場合は宿全体の大きな問題に発展することはなかったが、一部の不信感を表した宿泊客とトラブルを起こした人物とのあいだに距離感が生まれ、以後、二者関係のあいだでコミュニケーションを行なうことはほとんど無くなってしまった。前者の事例のように宿泊客がトラブルをリスクだと認識した場合には、それを排除しようとする動きが見られる一方で、後者の事例のように宿泊客が「日本人宿」内の秩序や規範を脅かす存在であった場合は、あからさまな行動としてあらわれることはないが、親密な関係性からは排除されてしまう。このような現象は「日本人宿」という空間における状況に対して共通の理解をもつ必要性があることを示している。いいかえれば「参加者が、今、ともに行なっているひとつのことを意識する感覚」(Goffman 1963 = 1980 : 104)が必要とされるのである。

(特定の参加者が出入りする)儀式は、出会いの過程で参加者が「一定の線」を踏みはずさないための社会的コントロールの役割をはたすとともに、そこで保持されている相互作用に対して外部との境界線をしく。それゆえ、一般に、個人は進行中の出会いにずるずると引きずり込まれるか、全く除外されるかのどちらかなのである (Goffman 1963 = 1980 : 105)。

「日本人宿」内の宿泊客同士が関係性を構築していく過程には、単純な「旅先での素敵な出会い」としては捉えられない側面を持つ。バックパッカーあるいは「日本人宿」の構成員の一人としていたためには、日本での日常世界と同じようなさまざまな相互作用が繰り広げられている。群れないことが良いとされる価値観を抱えて、日常世界を離れて旅をするバックパッカーたちは、「日本人宿」という空間で情報交換を通して群れ、そこにおける日常的な秩序や規範を軸とした共同体を形成していく。ある旅行者が「(以前、)一年半くらい旅したけど、一年くらい経つと飽きちゃって、後の半年は再会のための旅って感じだった⁹⁾」と旅を総括するように、異国を旅するバックパッカーにとって出会いは最も大きなイベントのひとつなのであろう。しかしこのイベントは非日常的な運命の出会いではなく、あくまで日常的な規範や秩序の上に形成されていくものだといえる。

おわりに

「日本人宿」におけるバックパッカーの相互作用には、旅に関する言説で語られるような孤独でストイックな旅人像は見られない。彼らは日本を遠く離れた異国の地という非日常的な空間において、「日本人宿」という空間を共同利用しながら日常的な相互作用を行い、バックパッカー同士の親密な関係性を構築していく。さらに、その関係性の構築には開放性と閉鎖性が入り混じった独特の秩序や規範を見ることができる。藤村正之は、現代社会では日常と非日常の区別が曖昧化し「日常と非日常の入れ子構造的な現象」（藤村 2004：41）が起こっていると指摘している。このように日常性あるいは非日常性の存立そのものが問われるような状況のもとで、本論で行った、「日本人宿」でバックパッカーが繰り広げる相互作用とそれによって形成される共同体に関する考察は、現代社会における日常性と非日常性に関するより一般的な問題に対して何らかの示唆を与えることができるのではないだろうか。

【注】

- 1) 日本でこの時期にバックパッキングが始まった理由として、観光目的の海外旅行の自由化（1964年）、外貨持出し制限の廃止（1967年）などの海外旅行に関する規制緩和があげられることがある。しかし自由化が行われたといっても、1960年代末ごろまでは、海外旅行はまだ限られた一部の富裕層だけのもので、金銭的に余裕のない多くの旅好きの若者たちにできたのは鉄道を使って北海道を一人で旅することであった。彼らの多くはキスリングと呼ばれる幅広のバックパックを背負い、そのため狭い場所などで横歩きしなければならなかったことから「カニ族」と呼ばれていた。バックパッカーが本格的に海外へ旅行に出かけるようになったのは1980年代になってからである（新井 2001、前川 2003）。
- 2) 日本におけるバックパッカーの歴史の詳細については、新井（2001）及び前川（2003）参照。
- 3) 近年、最も注目されたバックパッカーは2004年のイラク邦人殺害事件の被害者・香田証生さん（当時24歳）であろう。彼はワーキングホリデー制度を利用してニュージーランドに滞在した後、バックパッカーとして中近東を旅行していた。ヨルダン・アンマンからイラクに入国した際に、武装組織に拉致され、その後殺害された。この事件に対しメディアは、「自己責任」という言葉を用い彼の行動を非難した（下川 2005）。

このようにバックパッカーがメディアに取り上げられるのは、何らかの事件に巻き込まれた場合であることが多い。そのため彼らに対して「ネガティブ」なイメージが付与されていることもあるが、それでもバックパッカーとして海外旅行をする者は多い。

- 4) 『地球の歩き方』は1979年にヨーロッパ編とアメリカ編の創刊からはじまり、現在では200以上のタイトルを数える。出版元であるダイヤモンド・ビッグ社の現社長・西川敏晴が、大学生時代にヨーロッパ旅行した際に出会ったガイドブック“*Europe on \$5 a Day*”（Arthur

Frommer 1957) がモデルとなっている。ガイドブックに読者投稿欄が設けられているというスタイルは“*Europe on \$5 a Day*”と共通している(河出書房新社 2000)。

- 5) 『旅行人ノート』は月刊誌『旅行人』(2004年148号より季刊化)を発行する(有)旅行人から出版されているガイドブックである。雑誌『旅行人』は、1986年に蔵前仁一が創刊した同人誌『遊星通信』がはじまりで、92年に旅の専門誌として『旅行人』と名称を変え、現在に至る。『旅行人ノート』はこれらの雑誌をもとにして、96年にバックパッカー専門のガイドブックとして創刊された(河出書房新社 2000)。
- 6) フィールドワークで訪れた国は、中国、インド、パキスタン、イラン、トルコ、ブルガリア、セルビア・モンテネグロ、ボスニア・ヘルツェゴビナ、クロアチア、ハンガリー、オーストリア、イタリア(含バチカン市国)、ドイツ、スペイン、アンドラ、エジプト、タイ(訪問順)の合計18ヶ国である。
- 7) A氏への聞き取りから、2006/4/23 大阪にて
- 8) J氏への聞き取りから、2006/1/26 エジプト・カイロにて
- 9) H氏への聞き取りから、2005/5/6 中国・成都にて

【参考文献】

- 新井克弥、2001、「メディア消費化する海外旅行～バックパッキングという非日常」嶋根克己・藤村正之編著『非日常を生み出す文化装置』北樹出版、111-137
- 藤村正之、2001、「現代社会における日常／非日常の構図—高度消費社会への動的スタンス—」嶋根克己、藤村正之(編)『非日常を生み出す文化装置』北樹出版、38-64
- 藤原新也、1982、『全東洋街道 上』集英社
- Goffman, Erving., 1963, *Behavior in Public Places: Notes on the Social Organization of Gatherings*, The Free Press. (＝1980、丸木恵祐・本名信行訳『集まりの構造——新しい日常行動論を求めて』誠信書房)
- 河出書房新社、2000、『KAWADE 夢ムック——文藝別冊 アジアン・トラヴェラーズ』河出書房新社
- 前川健一、2003、『異国憧憬——戦後海外旅行外史』JTB
- 旅行人編集部、2002、『旅行人ノート アジア横断〔改訂版〕』旅行人
- 旅行人編集室、2002、『旅行人ノート メコンの国——インドシナ半島の国々〔第3版〕』旅行人
- 斉藤聖二、2003、「バックパッカーになる」青柳まちこ編『文化交流学を拓く』世界思想社、26-43
- 沢木耕太郎、1986、『深夜特急(黄金宮殿)第1便』新潮社
- 下川裕治、2005、『香田証生さんはなぜ殺されたのか』新潮社

【参考ホームページ】

「アルキカタ・ドット・コム」

<http://www.arukikata.com/> 2006年10月26日

「Khaosan Traveler's Lodge」

<http://www33.ocn.ne.jp/~asiabeer/> 2006 年 10 月 19 日

「香田証生さん人質事件のまとめ」

<http://iraq.sakura.ne.jp/koda/> 2006 年 10 月 19 日

「Tree of Life GUEST HOUSE」

<http://www.ttis.jp.org/treeoflife/index.htm> 2006 年 10 月 19 日

【主なインフォーマント】

- A 氏：30 代女性。学生時代から頻繁に海外旅行へ出かける。大学卒業後就職したが、数年で退職しバックパッカーとなる。2005 年 3 月にタイ・バンコクへ渡り、2005 年 11 月にはアジアを横断しトルコへ。トルコからは南下し、エジプトを経てケニアへ。その後は東欧を周遊し、再びタイ・バンコクを経て 2006 年 4 月に帰国。
- B 氏：25 歳男性。日本で美容師として働いていたが、退職しバックパッカーとなる。ヨーロッパを周遊後、アジアを東へ移動、インドへ。
- C 氏：27 歳男性。専門学校卒業後、調理師として働く。およそ 1 年かけてユーラシア大陸横断。2006 年 6 月帰国。現在は派遣社員として働き、オーストラリアのワーキングホリデーのための資金を貯蓄中。
- D 氏：21 歳男性。大学生。2005 年 2 月、大学を休学し世界一周の旅へ。アジア横断、アフリカ縦断、中南米縦断し 2006 年 3 月帰国。
- E 氏：21 歳男性。大学生。大学を一年間休学。アジア横断、アフリカ縦断し 2006 年 2 月帰国。在学時にイベントの企画・運営をしていたという経緯から、旅行中に着物会社のスポンサーがつく。そのため、しばしば着物姿で行動。
- F 氏：27 歳男性。大学卒業後、アルバイトで旅資金を貯め、2004 年 9 月にタイ・バンコクへ。東南アジアを周遊後、中国、ネパールを経てインドへ。インドに約半年間滞在した後、アジア横断。2005 年 11 月からは、約 3 ヶ月かけてヨーロッパ横断。タイ・バンコクを経由して 2006 年 4 月帰国。現在は公立中学校に勤務。
- G 氏：40 代男性。写真家。夫婦 2 人で旅行。2004 年 8 月に中国へ渡り東南アジア、インドを経てアジア横断。2005 年 12 月からはアフリカ大陸を南下、ケニアから東欧へ渡り、周遊。その後シベリア鉄道を利用し 2006 年 9 月、日本へ帰国。
- H 氏：20 代男性。会社員。長期休暇を利用してチベットへの旅行。数年前におよそ一年半かけてアジア横断、アフリカ縦断する。元バックパッカー。
- J 氏：30 代男性。大学卒業後、公立高校で非常勤教員として働くが、退職。旅行期間約 3 年。